

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

(SF小説) ナクバの東 (二十三)

第一部「イスラエル、イラン核施設を空爆す」(二十)

第六章 三羽の小鳥(三) 「アブダッラー」 (三―三)



ただこの点については基地出発前のミーティングで、サウジアラビアの迎撃の可能性は無い、と上官から告げられていた。政府上層部が空爆計画実施の数日前米国に秘かに計画実行の日時を通告、その後米国とサウジアラビアの間でイスラエル戦闘機の通過を黙認することが合意された、と教えられていた。しかしパイロット達には念のためイラク国境近くにあるサウジアラビアのハファル・アル・バテン空軍基地の近くではこれを大きく迂回し、サマワの南方を飛ぶよう指示が与えられた。イラク領内深くに飛行コースを変更するのである。イラクの制空権は米軍が握っているため攻撃される心配はない。

幸いハファル・アル・バテン基地から戦闘機がスクランブル発進する様子はなく、そのことは米国の軍事偵察衛星でも確認された。三人のパイロットは少し安堵して一路目標のナタズにむけて高々度飛行を続けた。彼らはサウジアラビアが米国の意向に背くはずはないと信じて疑わなかった。とにかくイスラエルと米国は強い信頼関係で結ばれ、サウジアラビアごときが反抗できるはずはない、と言うのが三人のパイロットだけでなくイスラエル軍部全体の揺るぎのない確信であった。

しかしその頃、ハフアル・アル・バテン基地の内部では慌ただしい動きが起こっていたのである。

(続く)

荒葉一也

(From an ordinary citizen in the cloud)